

方法的循環―概念の獲得過程

―『経済学・哲学草稿』に関するノート（一）―

永野基綱

一

六〇年代から七〇年代にかけて豊かに展開したいわゆる初期マルクス研究史において、最も重要な資料的役割を果たしたものの一つが、一九三二年に公開された、いわゆる『経済学・哲学草稿』（以下『草稿』と略記）であり、中でも、アドラッキーによって「疎外された労働」の名の下にその第一草稿末尾に位置づけられた部分であったこと、このことは改めて言うまでもなからう。しかしながらまた周知のように、「疎外された労働」の稿ひいては『草稿』への一貫した関心にもかかわらず、初期マルクス研究史の流れの中では、その受けとめ方に、かなり大きな変化があった。

註 マルクス『経済学・哲学草稿』 Marx : Ökonomisch-philosophische

Manuskripte in 1844 : Marx Engels Werke, Erg. Band 1, 1968, Dietz Verlag 以下『草稿』の引用は、いちいちことわることなく、この MEW. の頁のみを記すこととする。但し訳語訳文は、訳語選択の為に必要な議論をさける為、原則として、城塚、田中訳の岩波文庫版によることとした。

従って、本文中においても、例えば Privateigentum は、原則として「私的所有」ではなく「私有財産」となっている、等である。とはいえ勿論、訳文の恣意的部分引用による問題があれば、それは引用者の責任である。

すなわち、初期マルクスを、史的唯物論の確立にいたらぬ単なる準備期間として捉える見方の支配に対して、逆にその人間主義をマルクスの原点

として強調する見方が、客観主義的マルクス主義への批判という形で提出された際には、『草稿』とりわけ右にのべた部分が、そのようなマルクスの人間主義的「原点」の最も集中的に表現された箇所として注目された。だが、そのような人間主義的解釈への批判としてはじまった、いわば研究史の第三期ともいえる段階に入るや、『草稿』において完成された前期マルクスを、ヘスをはじめとする青年ヘーゲル派の流れの中で改めて検討することによって、そこから後期マルクスへの思想的展開を、いわば前マルクス主義的な一つの思想からマルクス主義という次なる思想への展開過程として跡づけようという立場が提出された。そしてそのような視点は、とりわけ『草稿』と『ドイツ・イデオロギー』との間に関心を集中し、（最も代表的な広松渉氏における、「疎外論」から「物象化論」へ、というように）そこに一つの「転換」をさぐると共に、その転換のうちに含みこまれた断絶と連続を明確化しようという努力となつて現われたのである。こうして、『草稿』の研究も、初期マルクスという一つの思想の内部構造の検討という課題の中に位置づけられたのであった。

註 広松渉『マルクス主義の成立過程』一九六八、『マルクス主義の地平』一九六九、他。

そして、そのような『草稿』への深化された検討の中から浮び上つてきたものの一つが、『草稿』の掘る方法にみられる、循環論ないし円環論的な構造であった。既に赤羽裕氏が言及しているように、つとに三木清も、

体系の保守性は方法の保守性と相即的であり、マルクス（及びエンゲルス）に対するヘーゲル弁証法の保守性はその円環性にある、と指摘している。『草稿』が、ヘーゲル批判をその中心課題としてもつ初期マルクスの中に位置づけられつつ、しかもなお、もし「ヘーゲル弁証法と哲学一般との対決……（の）仕事はまだ成しとげられていない」（468）とするならば、この『草稿』のもつ問題性の一つは、ヘーゲルの方法的円環性の克服の努力とその不十分さという形においても現われる筈である。

註 赤羽裕「批判」としてのマルクスの思想体系の方法的基礎「一九六九。

三木清「ヘーゲルとマルクス」一九二八。

ところで、そのような『草稿』の方法的循環性ないし円環性は、勿論相互に関連をもちつつも、様々なヴァリエーションのうちで指摘されえよう。例えば、『草稿』におけるいわゆる「疎外論」は、疎外されざる本来の人間存在すなわち類的存在 *Gattungswesen* といったものを前提とする批判の論理であるが、そのような批判は、結局疎外からの回復の主張として、循環論的にしか完結しない、という指摘。また、そのような類的存在を前提とする批判の論理は、マルクスが、継続中であつたヘーゲル批判をフォイエルバッハを受けつぐ形で『草稿』でひきうけようとしていることを示しているが、しかもなお一方では、逆に、『草稿』でのマルクスは、労働を対象化の過程、自己産出の過程として捉えるヘーゲルの立脚点に拠つた上で、フォイエルバッハ的な静観の人間観を批判する地点にまで進もうとしている、という指摘。等々。これらの問題が、既にのべたような、マルクスと青年ヘーゲル派等との思想上の相互交渉とか、またマルクス自身の思想形成史とかいった、いわば「横断的」、「縦断的」な研究の中で、諸研究者によって様々な角度から検討されてきたわけである。

そしてまた、『草稿』のもつ方法的循環性といえは、周知のようにマルクス自身が、「哲学者でない方を清算」した『ドイツ・イデオロギー』においては、次のようにいつているのである。「……全過程（を）『人間』の自己疎外過程 *Selbstentfremdungsprozess* として捉える」論理は、結局、「後の段階」が「前の段階」に「おこけられる *unterschlossen werden*」とつらぬ「倒置 *Umkehrung*」に他ならない。つまりこ

れは、『草稿』における如き「疎外」の論理が、帰結を原因とする一つの循環的方法に他ならないことを、マルクス自らが認めたものだと思ふことができる。

註 マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』 Marx, Engels: Deutsche Ideologie, 1845-6

けれども、『草稿』でのマルクスの疎外論の方法にまつわる循環的ないし円環的構造は、たんに、研究者の批判的検討の眼に対してはじめて現われたり、もしくは『ドイツ・イデオロギー』等のマルクス自身の自己批判的な眼に対してはじめて現われたりするものであろうか。否、むしろ既に『草稿』の中において、マルクス自身が自らの方法のもつ一種の循環的ないし円環的構造に気づいていた、といえるのではなからうか。本ノートは、右に述べた諸研究者のより広い視野からの議論の基礎にあるものを、改めて『草稿』テキストそのもののうちで、しかも主として第一草稿に含まれるただ一箇所にこだわつつ、自らの眼で確かめておく為のものにすぎない。

註 もとよりこのことは、右にのべた諸研究が、『草稿』テキストについての厳密な徹視的検討の上にたつものであることを何ら否定するものではない。一例をあげれば、周知のように藤野渉氏以来、「*Entgegenständlichung*」というたつた一つの語をめぐる様々に交された議論（そのような「こねくり解釈」にこそ「講壇マルクス学者の腐敗」があるという黒田寛一氏の意見まで含めて）をみれば、そのことは充分わかる。いづれにせよここでは、そのような諸研究の成果に新しいものをつけ加えるというよりは、ただ『草稿』に関する、筆者の関心に基く旧い読書ノートに多少手を加えて活字にすることにしたい。

二

何よりまず、本ノートでわれわれが問題にしようとしている『草稿』の当該箇所をあげてみる。

「たしかにわれわれは、外化された労働（外化された生活）という概念

を、私有財産の運動からの結果として、国民経済学から獲得してきたにちがいない。しかしこの概念を分析すると、……私有財産は、それが外化された労働の根拠、原因として現われるとしても、むしろ外化された労働の一帰結にほかならないことが明らかとなる」(320)。

われわれが検討しようとしている問題、すなわち、『草稿』の方法における循環的構造は、さしあたりこの箇所、全面的に集約されている。すなわち、一読してわかる通り、「しかし」で区切られたこの文の前段と後段とは、いわば論理的方向が全く逆転して述べられているのであって、つまり、前段で「根拠、原因」とされたものが、後段では逆に「帰結」とされる、そうマルクスはいっているのである。

ここにあるのは単なる構文上の問題なのではない。つまり、例えば、国民経済学が誤って原因と捉えていたものは、正しくは逆に帰結として捉え直さるべきなのだ、といったことのみが、ここで表わされているのではない。より厳密に読むならば、マルクスはここで、(前段)他ならぬ「われわれが……結果として……獲得してきた Wir haben……als Resultat …… gewonnen」その「概念」が、実は、(後段)「根拠、原因 Grund, Ursache」に他ならないことが「明らかとなる es zeigt sich」、と述べている。つまり、ここには、『草稿』における「われわれ」の方法に関する一種の循環的ないし円環的構造が示されているのである。

註　ところで、既に触れた三木においてもそうであるように、「循環(論)的」とか「円環(論)的」とかいうことは、開かれた論理としての(唯物)弁証法との対比の中で、悪無限の循環の論理として批判的に用いられることが多い。その意味では、ここで深い検討ぬきに『草稿』の方法について、それを「循環的」ないし「円環的」と呼ぶことは、大いに慎重さを欠くことになるだろう。けれども逆にまた、例えば「弁証法」という語を用いることによって、『草稿』の方法に関しても、既にこの問題が前以て解決済みであるかのようなみせかけをとることは、更になすべきではないだろう。勿論、われわれは、ここで、「循環的」構造と仮によんでおく方法上の問題が、例えば後『経済学批判』への序説(草稿)『においてマルクス自身が主題的に検討を加えている周知の方法上の問題につながってゆ

くことを知っている。「循環的」ないし「円環的」という語は、ここでは、そのような議論以前の、いわばあいまいなままの表現として、あえて使っておく。

さて、最初に注意しておきたいことは、「疎外」と「外化」という語に關してである。われわれが主題的に引用した文中では、「疎外された entfremdet」という語が用いられず、「外化された entäussert」という語が用いられている。周知のように、先にのべた諸研究の論点の一つは、「対象化 Vergegenständlichung」、「外化 Entäusserung」そして、「疎外 Entfremdung」という語の同異をめぐる問題である。そして、われわれもまた後に、その問題にいささか触れねばならなくなるのだが、しかし少くともこの箇所というなら、マルクスが「外化」という語を「疎外」から区別して用いているわけではない、ということには、おそらく異論はないだろう。従って、以下の論述では、議論を分散させないために、この二つの語は一応区別せず、むしろ可能な限り「疎外」の語で統一しておくこととする。

さて本題に戻ろう。問題の文は、他ならぬ「疎外された労働(外化された労働)」という概念をめぐって、次のことが主張されていたのであった。すなわち、「われわれ」の方法には、(前段)「概念の獲得」と(後段)「概念の分析」という二つの過程が明確に区別されて組込まれており、そして、その二つの過程は、「根拠—帰結」の關係に關して、全く逆の方向にある、と。そして、そのことが、「疎外された労働(外化された労働)」と「私有財産」という二つの概念の關係として示されているわけである。(前段)「われわれ」が「獲得」したこと——「疎外された労働」は、「私有財産」の結果である。(後段)「分析」によって明らかになったこと——「私有財産」は「疎外された労働」の帰結である。

本ノート(一)では、まずその前段を検討してみることとする。

三

われわれは既に次のことをのべた。引用した文全体は、単に、国民経済

学の（根拠—帰結という）論理的方向に対して、マルクスが逆の方向こそを自らの主張だとして批判的に対置した、といったものではない、と。いかえれば、文の前後が国民経済学の主張を、後段がマルクスのそれを表している、といったものではないのである。ところで、それについていうなら、むしろ前段の方向のうちにこそ、すなわち、「私有財産」を「疎外された労働」の根拠、原因とみるという視点にこそ『草稿』におけるマルクスの中心主張をみようという見方が、少くともかつては多くあったわけである。それはおよそこうである。

『草稿』におけるマルクスの労働概念は、ヘーゲルに負うところ大きい。周知の箇所でマルクスはいう。「ヘーゲルの『現象学』とその最終的成果において—偉大なものは、なんといっても、ヘーゲルが人間の自己産出を一つの過程としてとらえ対象化を対象剥離として、外化として、および外化の止揚としてとらえているということ、こうして彼が労働の本質をとらえ……ているということである」(574)。だが、このような、「労働の本質をとらえ」たという大きいヘーゲル評価にもかかわらず、マルクスはいうのである。「彼は労働の肯定的な側面を見るだけで、その否定的な側面を見ない」(574)。労働の「否定的側面」とは何か。「ヘーゲルは労働を、……自己を確認しつつある人間の本質としてとらえる」。だがそのことは、「ヘーゲルにあつては、人間の本質、人間は、自己意識に等しいと見なされる」(575) ことによつて可能となる。従つて労働といつても、「ヘーゲルがそれだけを知り承認している労働というものは、抽象的に精神的な労働である」(574) 以上強調はマルクス)。かくて、ヘーゲルが労働の否定的な面をみなかったという指摘は、ヘーゲル労働概念の観念性、思弁性の指摘に他ならないようにみえる。

マルクスによれば、そして、国民経済上の事実としての「労働」のあり方こそ、このようなヘーゲルの思弁的な労働概念を破るべきものに他ならなかった。なぜなら、こうである。ヘーゲルは、労働する意識は「自身自身に對することとなり、対自存在となる」、すなわち「労働を通じてこの意識は自己に達する。……労働する意識は、自己自身として自立的存在を直観するようになる」という。だが、国民経済との事実からすれば、逆

に、「労働者の活動は彼の自己活動ではないのである。労働者の活動……それは労働者自身の喪失なのである」(574)。そしてこれこそ、マルクスが「疎外」とよんだものに他ならなかった。このようにみると、結局ヘーゲルが見なかったとされる「労働の否定的な面」とは、国民経済的事実としての労働の「疎外」に他ならないようにみえる。

註 ヘーゲル『精神現象学』 Hegel: Die Phänomenologie des Geistes, 1807

そして、ここに、前に触れた、三つの用語の同異の問題が関連してくることになる。すなわち、右のようにみるなら、マルクスによれば、ヘーゲルは労働を「外化として、および外化の止揚として捉えている」が労働における「疎外」を捉えてはいない、となるわけである。が、もともと「疎外」の概念そのものはヘーゲルにおける重要な概念であることはいうまでもない。となると結局、ヘーゲルがその語を用いつつも実は「疎外」を見なかったということは、次のようにいい換えられうるわけである。すなわち、ヘーゲルは、「対象化」ないし「外化」と「疎外」とを、カテゴリー的に区別しなかった。そしてその判断は勿論、一方マルクスは「国民経済上の事実から出発」することによつて、この両者を区別した、という判断に対応しているわけである。この「対象化」ないし「外化」と「疎化」とのカテゴリー上の区別とは、つまり、労働一般の概念と国民経済上の事実としての労働、ないしそこから導き出された労働の概念との区別に他ならないことはいまでもない。

註 われわれはここで、このカテゴリー上の問題に、われわれ自身の見解をもつて関することはできない。ヘーゲルは区別せずマルクスは区別した、という右のような解釈に対して、広松氏の如き、マルクスは区別していないという意見、更に宮本十蔵氏の如き、むしろヘーゲルは区別しているという意見、等があることを指摘しておくにとどめる。

そして周知のように、これが、ルカーチ以来の一つの典型的な解釈といえよう。「ヘーゲルは資本主義における非人間的な疎外を対象化一般と混同」している。「ヘーゲルにおけるこの誤った等置をマルクスは唯物弁証法的に批判した」。すなわち、マルクスは「労働そのものにおける対象化

と、資本主義特有の形態の労働における人間の自己疎外とはつきり区別した。とはいえ、『草稿』の段階では、マルクスは、資本主義を一つの特異歴史的段階として捉えるに至っていない。彼はむしろ、後にのべるように、『国民経済』それも『国民経済学』を通してのそれ、を問題にしたのである。ではさし当り、そのような形で現われる国民経済とは何か。『国民経済学』は私有財産という事実から出発する。国民経済学によって捉えられる国民経済とはかくて、「……私有財産が現実のなかでたどってゆく物質過程」(510)に他ならない。こうして、ルカーチ的解釈によるマルクスの主張、すなわち、資本主義という国民経済的現実の下で労働の「疎外」がひきおこされるという主張は、次のようにいい換えられうるわけである。私的所有制(「私有財産」)の下で、労働は「疎外された労働」となる。つまり、「私有財産」が「疎外された労働」の根拠、原因である、と。こうして、われわれが問題にしている箇所というなら、まさにその前段を形づくる方向にこそ、『草稿』でのマルクスの主張の主眼点があった、ということになるわけである。

註 ルカーチ『若きマルクス』G. Lukács: Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx, 1840-1844, 1954

だが、このような解釈は、広松氏流に言えば「左翼系の論客が「疎外」を言々する場合」の立論として一般的であるにせよ、いささか単純な『草稿』の読み方に基いているものであることを、既にわれわれは知っている。少くともわれわれがとり上げ検討しようとしている問題の箇所で、マルクスは、今みたような論述の方向をとってはいない、むしろ、例えば、「私有財産」と「疎外された労働」についていえば、その後段に明確に示されているように、全く逆の論述をしているのであった。

四

けれども、それでは右にみたような『草稿』の捉え方は、全くマルクスの誤読であり、そして、前段の論理的な方向は、全く検討に値しないのであ

ろうか。われわれは既に、前段は、構文上ひきあいに出されたといったものにすぎないのではない、と見ておいた。すなわちわれわれは、そこに一つの「循環的」過程をよみとり、前段と後段に示されているものを、仮にそれぞれ、「概念の獲得」過程と「概念の分析」過程と表しておいたのであった。もしこのようなわれわれの見方が、一つの文章の問題をこえて有効であるとするならば、右にみてきたような方向での(「私有財産」を「疎外された労働」の根拠、原因とみる)捉え方は、マルクスの捉え方そのものとして全面的に強調されるべきものではない代りに、また例えば国民経済学的捉え方として全面的に否定されるべきものでもない、ということになるだろう。問題は『草稿』における方法上の一つの「循環的構造」である。右にみた方向は、その方法上の「循環的」構造の中に、いわばその前段的な過程において現われる論理的な方向として位置づけらるべきであり、その意味での「概念の獲得」過程として検討されるべきではないだろう。

とはいえもとより、「獲得」された概念が、「分析」過程における論述の主語となつてゆくべき基礎概念であること、そのことは、本来、「分析」過程においてはじめて、いい換えればその基礎概念の上に立てられてゆく「理論」そのものにおいてはじめて、確認されるべきことだろう。従って、それに先だつ「獲得」過程は、実際にはあくまで、いわば学の「予備的」過程と見做さるべきものにすぎないといわねばならぬ。そしてたしかに、後、マルクスは、『経済学批判』への序説(草稿)『(いわゆる『要綱』)をへて、われわれが仮に「循環的」方法とよんでいるこの方法的構造の前段を、はつきりと学の「予備過程」と自覚的に捉え、学的論述から消滅させるに至る。こうして、例えば『資本論』でのマルクスは、予備過程としての「研究方法」を「叙述方法」から意識的に排除することによって(第二版後書)はじめて、商品という概念から出発することができたのである。けれども、少くともこの『草稿』においては、この前段に当る過程は消滅してはいない。否むしろ、それが他ならぬ未整理な「草稿」であるということをこえて、マルクスはこの前段の過程を強調しているとさえいえるのである。ここに、『草稿』でのマルクスが、くり返し、国民経済上の

現にある「事実から出発する」¹⁾と云っていることの意味がある、とわれわれは見る。

注 マルクス『経済学批判への序説(草稿)』Marx: Einleitung zur Kritik der Politischen Ökonomie (Nachlass)。但「『分析的過程』という語は、『草稿』におけるとは逆に、そこでは第一(前段)の過程について用いられている。『資本論』第一巻: Das Kapital, B. I, 1862

『草稿』テキストについて具体的にいうなら、こうなるだろう。「疎外された労働」という当該の稿では、確かにこの概念が「分析」され、「私有財産」がその「分析」から「結果」として導き出されることになるのであって、つまりこの稿は第一草稿の中心として、マルクスのその概念に関する学理的ないし理論的論述部分に当るわけである。けれどもその稿は、周知のように第一草稿末尾に位置しているものであって、それは、「われわれは出発した wir sind ausgegangen ……」われわれは示してきた wir haben gezeigt」(510)と云う冒頭の一句によつて、前半部分をうけた形で始まっているのである。そして、そのいい方からもわかるように、一方第一草稿前半部分は、「われわれ」が(分析に先立つて)「完了」してきた過程としてあり、しかもそこに含まれる論述は、問題の後半部分で(分析に従つて)その不充分性が示され、更にその論述方向が逆転される筈のものである。その意味でこの部分は、われわれのいう「概念の獲得」過程と見做されてよいだろう。「私有財産」を「疎外された労働」の根拠、原因とする前段の方向にマルクスの主張そのものをみようという前述のような解釈は、明らかに誤解であるのだが、しかもここで、第一草稿前半部分についてその方向での論述に、なお少しくこだわってみようというのに、その意味においてなのである。少くとも、この部分は、たとえ右のような見方が当たっていないにしても、『草稿』でのマルクスの論述方法、ひいてはそこの「疎外論」の方法にとつて、軽視されてよい部分ではないだろう。

注 なお念の為にいっておけば、最初の節の最後にのべた通り、勿論ここでわれわれは、マルクスの思想の形成過程を広い地平で問題にしようとしているのではなく、「疎外された労働」という「概念の獲得」過程とは

いっても、それは、マルクスその人の個人思想史の中での獲得過程を問題にしようというのではないのであって、ただ、『草稿』の論述における限りでの、方法的構造の一環を問題にしているにすぎない。

但し、第一草稿前半部分の三つの欄の關係やその執筆順序といったラービン以来の問題や、マルクスのページづけの意味、その他の文献学的な問題は、ここでは触れる能力がないので問題の外に置く。

五

さて、第一草稿前半部分といえは、周知のようにスミスを主とする国民経済学等の引用を中心とした部分である。そしてそのことは、いわゆる前段の獲得過程が、先に引用した問題の箇所等で、「国民経済学の諸前提から出発し」(510)、「疎外された労働」の「……概念を……国民経済学から獲得してきた」(520)過程である、といわれていることに対応しているわけである。そこでまず、国民経済学に対する『草稿』の關係から始めよう。

周知のように『草稿』を一つの区切りとするいわゆる初期マルクスの關心の中心は、ヘーゲル法哲学の批判という課題であった。その課題を、『草稿』の序文(但しこれは第一―三草稿より後に書かれている)をもとにして改めて整理しておけば、およそ次のようになる。『独仏年誌』二論文をへて、この『草稿』におけるマルクスの、ヘーゲル法哲学批判という課題は、それを通しての「法学および国家学の批判」というより広い場面で設定される。そのことから、ヘーゲル法哲学批判という課題は、一方において素材としての市民社会、国家についてのヘーゲルの思弁的な所論に対する批判、すなわちヘーゲルによる「素材の思弁的とりあつかいに対する批判」と、他方において市民社会や国家ないしは「法律、道德、政治などの批判」、すなわち「素材そのものの批判」(以上同)という、二つの面を含みこむこととなる。

さてそのうち、『草稿』におけるマルクスのヘーゲル思弁哲学への批判は、ごく荒つぽくい表すことが許されるなら、ヘーゲルによる「素材の思弁的とりあつかい」に、いわば素材の非思弁的とりあつかいを対置する

というところから始ることになるだろう。そして、マルクスがこのような意味でとり上げるのが国民経済(学) *Nationalökonomie* なのである。*Nationalökonomie* が国民経済という「素材」であり、かつ国民経済学という「とりあつかい」であるということは象徴的である。さし当りここで、二つのことが前提されるわけである。第一に、国民経済学のとりあつかう素材(の範囲)すなわち「国民経済」が、「国家、法律、道徳、政治、市民社会など」(470)という広義の素材範囲のうちで、いわば基礎的な素材であるということ。第二に、「国民経済学」の「国民経済」のとりあつかい方が、少くともこの素材の検討の出発点としては、非思弁的な、ありのままのあつかい方であると仮に見做しうること。

註 後みるように、実は、このこと、つまり「彼らの科学が……徹底的に……真実に展開されている」(83)ということが、重大な問題をはらんでいるのであるが。

なお、マルクスがどのようにして右の前提をなしたのかといったことは、ここでは勿論問題の外にある。

しかしながら、勿論マルクスのねらいは、ヘーゲル思弁哲学の批判を通して、「素材そのものの批判」へと向うことにあつた。その限りでは、マルクスは国民経済学に対して、(その対象とする素材が例えば政治、法律といったものをくとも直接的には含みこんでいないといった領域的な問題は別としても)、その素材のとりあつかいの仕方が、たとえ「ありのまま」であつたとしても、それをこえて「批判的」なものであるとは、当然みているわけではない。ここでも *Nationalökonomie* が「国民経済」であり「国民経済学」であるということは、象徴的なものである。

こうして、ここで既に、マルクスは国民経済学に対して二重の身の処し方をしていくことがわかる。すなわち、ヘーゲルの思弁性に対しては、国民経済学を通して現われる「国民経済上の現に存在する事実から出発する」ことによって、つまり「素材そのもののへ」と向ってゆくことで、乗りこえる出発点をぎずく。しかし他方、国民経済学をも批判的に乗りこえんとすることで、ヘーゲル批判をこえて「素材そのものの批判へ」という課題を、更におし進めてゆくのである。そして、このような国民経済学への

二重の関り方こそ、『草稿』中の問題の文の前段における二重性、すなわち、「国民経済学の諸前提から出発し」、概念を「国民経済学から獲得して」くるのだが、しかもそれは、国民経済学が「概念的に把握しない」ものを把握するという仕方でするのだ、という二重性につながっているわけである。

六

そのような国民経済学に対するマルクスの二重の関り方、それは例えば、問題の第一章稿前半部分における次のような文章にも、明白に示されている、「一般に労働の目的が富のたんなる増大にあるかぎりでは、……労働そのものは有害であり、破滅的である。このことについては、国民経済学者は気づいていないが、彼の説明からそう推論されるのである」(476)。それはどういうことか。このことをめぐっての証述を中心とする、「労賃」の欄の前半部分を検討することからはじめよう。ところでもとより、先にも触れたことだが、更にとりわけこの欄は、マルクス自身「ほとんど国民経済学者の言葉を用いて述べてきた」といっている(主としてスミスに拠る)部分であつて、その意味で「国民経済学の水準をこえ」(477)ているわけではない。けれども、少くともマルクスが、主として何をそこに、いわば自らに順接的に読みとり、逆に、何をそこに批判的に読みとったのか、ということをも、なお注意してみる必要がある。

右の文にいう、「労働そのものが有害 *schädlich* であり、破滅的 *unheilvoll* である」にもかかわらず「このことについては、国民経済学者は気づいていない」とは、どういうことか。第一に、国民経済学の労働力需給の議論からは、「労働者の一部は乞食の状態か餓死におちいる」(471)ということが導き出される。にもかかわらず、「国民経済学は、就業していない労働者、この労働関係の外部に在る限りでの労働人間を認めない」(483)。しかし更に、より主題的な就業労働者についても、次の事情がある。すなわち、国民経済学の理論からは、労働者の必然的な「窮乏 *Elend*」——「累進的 *progressiv*」、「錯綜的 *kompliziert*」ないしは「停滞的

stationär」な窮乏が導き出される。しかも重要なことは、そのような労働者の窮乏が「富裕な社会状態」においても現われざるをえないことであって、そしてこの状態こそ「国民経済」つまり「市民社会の目的であると同時に国民経済学の目的でもある」(477)——強調は引用者——のだから、国民経済学は、この窮乏を論結しつつも、それを批判する立場に立つことができない、ということになる。むしろ逆に、いわば労働者ひいては「社会の不幸が国民経済の目的だということになる」(476)のであって、この「国民経済 Nationalökonomie」は「国民経済学 Nationalökonomie」と読んでよいわけである。こうして確かに、「労働の目的が富のたんなる増大にある」「国民経済(学)からは、労働者にとっての「没落と貧困化」[Untergang und Verarmung] また「窮乏[Elend]」の必然的なことが読みとれるにもかかわらず、国民経済学はそれを批判する地点に立つてはいない。

だが、それでは「……労働そのもの(が)有害であり、破滅的である」ことに「国民経済学者は気づいていないが、彼の説明からそう推論される」とは、右にのべたことをいうのであろうか。そのことがマルクスの国民経済学に対する二重の関り方の主眼点であり、従ってまた逆に、そのことを論結、記述するだけで批判しえない国民経済学に代って、労働者の立場からそれを告発すること、そのことが、マルクスが批判的に「国民経済学から……獲得してきた」立場なのであろうか。そして、このことを、「国民経済学はプロレタリアを……ただ労働者としてだけ観察している」……「人間として観察しないで……」(477)という点から批判的に捉え返し、そして、国民経済の下で「労働者は……自分自身および自分の人間性を売らねばならない」(476)という点に着目した時、そこにいわゆる労働者の「自己疎外」という概念が浮び上ってくる、とでもいえるべきなのであろうか。だがこのような解釈は(少くともそれだけでは)、その背後に単に浅薄な労働者観ないし人間観しか浮んでこない。そしてまた、今のべたことには、たとえ理論的に「国民経済学は気づいていない」といえるにしても、マルクスの引用した限りでも、少くとも「国民経済学の批判にとりくんできた」(480)社会主義者たちは、当然「気づいて」いたわけであ

る。一方「疎外された労働」の概念は、周知のように後第三草稿において「粗野な共産主義者」(83)を批判する基礎ともなるべき概念であれば、なお更そのような地点に留るわけにはゆかない筈だろう。そしてまた、そのようないわば「一步下ったところから問題を立てずとも、第一に、もし労働者について、「没落と貧困化」また「窮乏」が「有害であり、破滅的である」というだけだとするなら、それはまだいわば労働者の「生活」の規定であつても、「労働」の規定ではない。一方「疎外された労働」の概念はあくまで、労働者の「労働」に関する概念なのである。再び問題を立てなおさなければならない。

註 くり返しのようになるが、ここでも例えば、マルクスの批判は社会主義者が「気づいていた」以上のものである筈だ、と読めるような右の論述には、いささか但し書きが必要だろう。というのも、マルクスは、少くとも「独創的」な「ドイツの社会主義的諸著作」(469)は、今のところヘスとエンゲルスに集約されると「序文」でいつているのだが、果してこの「草稿」の時点で、マルクス自身がヘスやエンゲルス以上に「独創的」な地点に立つていたかどうか、が、周知のように(ここでも広松氏を代表として)諸研究者の論点の一つとなつてゐるからである。勿論われわれはといえば、前述してきた通り、あくまで『草稿』の論述そのものを問題にしているのであつて、その視点からみれば、少くともマルクスは、例えば「労賃」の稿の後半でシュルツ等の労働の「有害」の指摘を引用しつつも、そこから自らの論を立ててゐるわけではない。

七

さて、今一度問題の文の前段をひく。「われわれは、外化された労働……という概念を、私有財産の運動からの結果として、国民経済学から獲得してきたにちがいない。しかし……」。ここには、二つのモメントがある。一つは、外化された労働(疎外された労働)という「概念」を「国民経済学から獲得してきた」ということ。二つは、その概念は、「私有財産の運動の結果として」現われる、ということ。われわれは、今や第二のモ

メント、すなわち問題にしてきた前段の論述方向そのものを問題にしてみなければならぬ。「疎外された労働」という概念は、「私有財産の運動からの結果として獲得」された。問題は「私有財産の運動」にある。私有財産（私的所有）Privateigentum とは何か。

私有財産とは、さしあたり「社会の富 der Reichtum der Gesellschaft」(473)として現われている。しかし、社会の富はステティッシュにあるのではない。それは、たえざる社会的収入によって支えられており、そしてまた逆に、それら収入は私有財産によって支えられている。問題の第一草稿前半部分で、マルクスが三つの欄に並行して考察を進めたのは、労賃、資本の利潤、地代という三つの社会的収入に他ならなかった。ここで重要なことは、収入ひいては私有財産が、三つのものに前もって分離され、しかも周知のように、それらが並行して考察されているということである。

「われわれは国民経済学の諸前提から出発した」、国民経済学は私有財産という事実から出発する」というのは、この「資本と地代と労働との分離 Trennung」(471)を前提としてそこから出発するということであり、それらが並行して考察されるということは、「分離」された三つのものの相互の関連こそが問題なのだ、ということを示している。かくて第一草稿前半部分で検討さるべき「私有財産の運動」(についての国民経済学の所論)とは、いわばこの分離と関連の運動(についての所論)だといえよう。しかしながら、そのうち地代をうみだす土地所有は「私有財産の根源 Wurzel」であるにせよ「私有財産の運動のなかにひきずりこまれ」(506)、国民経済の下では、次第に資本に吸収されてゆくのであって、かくてその結果「私有財産の関係は労働、資本、およびこの両者の関連 Beziehung である」(529)、ということになる。そこで「分離」を出発点とする「私有財産の運動」は、結局この「両者の関連」運動に集約されることとなるのである。

注 但し、「こ」で「私有財産の運動」という時、勿論、私有財産（私的所有制）の歴史的展開運動と、一つの国民経済の下での私有財産の相互関連運動とを、カテゴリー的に区別しなければならぬわけであるが、この問題はここでは考慮の外におく。更にいえば、『草稿』でのマルクス自身が、

いわば段階論的議論と原理論的議論とを少くとも峻別するという地点に立つてはいないのである。

なお、今みた「分離 Trennung」は、更に、『ドイツ・イデオロギー』以下でも主題となる「分業 Teilung」につながるのだが、ここでは、分業、交換という重要な問題は保留しておく。

さて、「私有財産の運動」がさし当り右のように捉えられようとして、では、その「運動の結果」とは、どのようなになるだろうか。まず第一に、その運動を「分離」の面で見るとすれば、それは、一方において「私有財産の最初の形態」たる土地所有を吸収して、資本が「完成せる私有財産」(638)ないし「私有財産の完成せる形態」(633)へと向う運動とみることができ、がその同じ運動が他方、労働を、「所有の排除 die Ausschließung des Eigentums」(633)という、いわば私有財産（私的所有）の根源的な欠如態として露わにしてゆく運動に他ならない。こうして今や、資本と労働の間にあるものは、単なる収入の区別といった意味での「分離」ではなく、「資本としての私有財産」と「労働としての私有財産」(634)という、私有財産の「分裂」であり、しかもいわば一方はその完成態、他方はその欠如態という、私有財産（私的所有）に関して全く相反する方向への「分裂」であるといえよう。そしてまた、第二に、このような「分離」の下での運動をその「関連」の面で見るとすれば、それは、まさに資本の「労働とその生産物にたいする支配権 Regierungsgewalt」(484)他方逆に「労働者にもっとも有利な社会状態のなかでさえ……労働者に敵対して……集積される資本への隷属 Knecht」(474)という関係のうちに現われるわけである。マルクスは、問題の第一草稿前半部分で、次の一文に、最初の強調符号をつけている。「労働者にとつては、資本と地代と労働との分離は致命的である」。そしてまたいう。「もっぱら労働者にとつてのみ、資本と土地所有と労働との分離は、必然的な、本質的な、しかも有害な分離である」(471)、と。「支配」と「隷属」とはどういうことを意味するのか、という問題は今はおく、また「もっぱら労働者にとつて」といういい方の下に、「分離」が「致命的」であり「有害」であるといわれていることについても、問題にしない。いずれにしても、「国民経済学

の諸前提から出発」し「私有財産の運動」をその「結果」へと向けて追ってゆく、この獲得過程とは、いい換えれば、私有財産の「分離」を、資本と労働の究極的な「分裂」の相へと追いつこんでゆく過程に他ならないといえるだろう。

註 例えば右の、「労働者にとっては……致命的」といった文にしても、それを簡単に、マルクスは「労働者の立場に立っている」といったことをいう為の保証としてはならないだろうことは、先に前節において触れたと同様である。もし、ここでマルクスの「立場」をあえて問題にしようとするのなら、むしろ逆になお問わねばならない。「分離」とその下での「労働」が「労働者にとって致命的」だと判断する時、「判断者マルクス」は、どのような仕方で「労働者」にかかわっているのだろうか。「労働者にとって für den Arbeiter」というその「労働者」とは誰か。「分離」の下にある労働者の自己意識にとって für ihn か、それとも「分離」の下にある労働者を自らの労働者概念に對置しつつあるマルクスないしはわれわれにとって für uns か。このいわばヘーゲルの問題は、おそらく小さからざる問題の筈である。

八

さて、「私有財産の運動の結果」をひとまず以上のように捉えておくとして、それではそこに、「国民経済学」はどのように関るのか。問題の一文の前段（獲得過程）を構成する二つのモメントは、どのようにして集約されるのか。けれども、もともと、「私有財産の運動」をその「結果」にまで追いつめることそのことは、第一草稿前半部分において「国民経済学」の所論を通してなされてきたのであった。かくて、もし（われわれが先に仮に認めておいたように）国民経済学 Nationalökonomie が国民経済 Nationalökonomie すなわち私有財産の運動の「ありのままのとり扱い」であるといえるならば、その運動の究極の「結果」もまた、国民経済学そのもののうちで、少くとも「とり扱われ」ているにちがいない。そして確かに、それ自身「私有財産の現実的なエネルギーおよび運動の一産物とも見なされるべき」国民経済学（このことが実は重要なのだが）こそ、

「分離」の下での私有財産の運動を、その究極的な相にまで追いつめたのであった。では、「素材」としての国民経済が、「私有財産の運動の結果」として、事実上の「分離」を、資本と労働の「分裂」として完成させる時、その素材の「とり扱い」としての国民経済学は、それ自身その運動の「一産物」としてどのようにして理論上の「分離」を完成させるのだろうか。それは一にかかつて、国民経済学が到達した、次の命題による。「資本とは何であらうか。「蓄積され貯蔵された労働の一定量である」（スミス）」（404）。この命題の故にこそ、「……エンゲルスは、正当にもアダム・スミスを、国民経済学上のルターと名づけた」（630）のであった。換言すれば、この命題において、いわば「分離」がまさに「分離」として、はじめて理論の中に姿を現したのであったといえるのである。このことを更に、失われたページへの付論である第三草稿「私有財産と労働」の稿などで、集約的に検討してみよう。

「資本とは集積された労働である」。国民経済の見出したこの命題において「労働者にとって致命的」な「分離」が理論上完成するとは、次のことを意味している。すなわち、この命題によって、労働と資本の「関連」は「労働という私有財産」と「資本という私有財産」（624）の関係、つまり私有財産自身の関係となるというよりむしろ「私有財産の主体的本質……主体としての私有財産」（630）たる労働自身の関係となる。いい換えれば、こうして資本と労働の「分離」が、労働における自己関係となるのである。そして、この自己関係ゆえにこそ、私有財産の関係は、労働者という「人間」のうちに集約されることとなる。「労働をその原理として認識した——アダム・スミス——国民経済学が、はじめて私有財産を人間の外にあるたんなる一状態とは、もはや思わなくなった」（610）。こうして、「……人間そのものが私有財産の本質と認められることによって、人間の外にあって人間から独立した……富は止揚され」（630）それとひき換えに、今や「人間そのものが私有財産の……緊張した存在 das gespannte Weesen」となる」（533）のである。スミス以来「国民経済学（は）……労働を富の唯一の本質として、さらにずっと一面的に、したがっていっそう鋭く、またいっそう徹底的に展開し」（533）てゆく。かくて、「彼らの原理

とは、こうした分裂の原理 das Prinzip dieser Zersissenheit なのだ」(531)、とマルクスはいうのである。

このことは勿論、国民経済学批判の原点となる。「労働をその原理とする国民経済学は……人間の否認 die Verleugung des Menschen を徹底的に遂行するものにすぎない」(531)。けれどもそれにもかかわらず、否それ故にこそマルクスは、「疎外された労働」の概念を、少くとも『草稿』の論述の上では、「国民経済から、私有財産の運動の結果として獲得してきた」のだといったのであった。なぜなら、「彼らの原理とは……分裂の原理」(531)であるのだが、しかもこの分裂に関してもあくまで、「労働が国民経済学の唯一の原理」(531)以上強調は引用者)だからである。つまり、それ自身「私有財産の……運動の一産物」たる国民経済学が、私有財産の分裂の運動を、労働概念へと徹底的に集約したこと、このことこそが、「疎外された労働」の概念の「獲得」への過程を設定したのであるといえよう。

われわれはこうして、今や、先にのべた「概念の獲得過程」を見渡しうる最後の地点に立っている。「獲得過程」において結果として獲得された概念が「分析過程」において根拠、原因たる基礎概念となる。だがそのこと、つまり獲得された概念が基礎概念であるというそのことは、いわば一つの理論の予備過程である「獲得過程」そのものにおいてではなく、「分析過程」においてはじめて論証されうる。そのように先にのべた。けれども、しかもなおそのことは、予備過程たる「獲得過程」が、基礎概念を模索する単なる試行錯誤の行程である、というようなことを意味するのではない。むしろ、「獲得過程」が予備過程であるのは、その過程自身が、既に一つの逆行ないし逆行の過程であるということによってなのである。マルクスはいう。「われわれは国民経済学の諸前提から出発した」。「国民経済学は私有財産という事実から出発する」(510)。この前提から出発し、私有財産の運動の結果へとたどってきた旅は、国民経済学の見出したかの命題において、私有財産の根拠への旅だったことが明らかとなる。「私有財産」とは何か。「分離」の過程を通して、それは資本として現われる。では「資本」とは何か。それは集積された労働に他ならない。そし

てここから、新たな一つの問いが姿を現わすにちがいない。——では「労働」とは何か。その集積が自らより「分離」して資本(私有財産)となるような、そのような「労働」とは何か。

いうまでもなく、この問いこそ、国民経済学が立てることなく、『草稿』においてマルクスが立てようとした問いであった。われわれもまた、この問いと共に、いわば概念の「獲得過程」から「分析過程」への逆転に立ちあうべく、「疎外された労働」の概念そのものの検討に向かうこととしよう。(一九七九・十二)